

CDの玉手箱

99

新譜試聴記 神倉健

ヘンデル「エイシスとガラテア」HWV49a

三澤寿喜指揮 キャノンズ・コンサート室内  
合唱団 & 管弦楽団

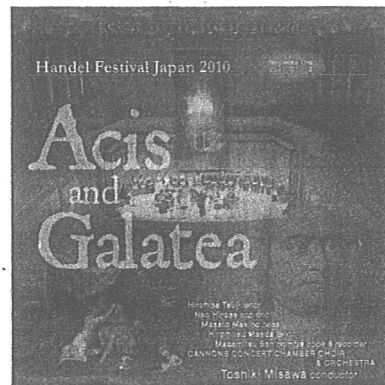
HFJCD 1001-2

言うまでもなくヘンデルはバッハと並ぶ大家だが、こと我が国ではバッハに比べ正当な評価が与えられているとは言い難い状況にある。こうした現状に一石を投ずべく、多様なヘンデル作品を真正な姿で沢く多くの音楽ファンへ紹介し、とかく《メサイア》をはじめとする一部作品に偏りがちなヘンデル像を修正することを目指して、2003年から活動を開始したのが「ヘンデル・フェスティバル・ジャパン (HFJ)」である。

この団体は、我が国に於けるヘンデル研究の最高権威・三澤寿喜氏によって組織され、これまでに本邦初演を含む様々なヘンデル作品を上演し、注目すべき成果を着実に重ねている(中でもヘンデルの宗教合唱音楽の演奏は、国内で滅多に行われることのない有意義な活動と言えよう)。演奏そのものの質にもこだわり、国内で活躍する一流の演奏家たちを起用すると共にホグウッドやオノフリなど、海外の名演奏家たちを招いて意欲的な公演を行っている。最新の研究成果に基づいた楽譜による《水上の音楽》や、《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》の現代初演など、国際的にも話題を呼んだ演奏会も少なくない。

これはそのHFJが、今年の1月13日に東京築地の浜離宮朝日ホールで行った公演を収めたライヴ録音盤である。現在国内で活躍している中堅・若手の古楽の名手たちを結集したオーケストラと、三澤氏の趣旨に賛同して集まった古楽の名歌手たちから成る少数精鋭の合唱団に、この分野では第一人者と目されるソリストを起用し、おそらく目下、国内で望み得る最高の布陣によって演奏された記念すべき公演の記録だ(因みに当作品は、HFJの第1回公演で採り上げられた演目でもある)。

ディスクを聴き(筆者は実演にも接しているが…)まず感じることは、とにかく「ヘンデルらしい」演奏だ、ということである。即ちヘンデル作品のもつ独特の雰囲気や特質を、ごく自然に表現



し尽くしているのだ。それは何より、指揮を執る三澤氏のヘンデル音楽に対する深い共感と熱い愛情に起因するものであろう。きびきびと速めのテンポで進められる氏の棒に即応し、その意図を忠実に体現する機動性に優れたオケ、ヘンデルの多彩な合唱技法を抜群のハーモニーと俊敏さで効果的に音化する合唱が、そこに多大の貢献を為していることは言うまでもない。しかしながら今回はライヴ録音であり、公演に参加した音楽家たちの本音からすれば、いままじ演奏を磨き込みたい部分もあるに違いないが、そこは、いずれ劣らぬ実力派揃い。さすがに全体としては、見事なまとまりをみせている。

その中でも殊に雄弁な存在感を印象づけられたのは、三宮正満のオーボエとガラテア役・広瀬奈緒の歌唱だ。ヘンデルのオーケストラに於いてオーボエは、とりわけ重要な役割を与えられたパートであり、当作品も例外ではない。音楽的センスの良さと表現の豊かさ、華麗な名人芸を併せもった三宮の演奏は、本作器楽書法の「鍵」となるこのパートを彩り豊かにもり立て、聴き手の耳をそばだてさせる。そしてガラテア役・広瀬の名唱こそ、本公演の最大の聴きものといってよいだろう。美しい歌詞の発音と卓越した技巧、透明感溢れる伸びやかな声質は清楚にして可憐なこの役柄に、否、ヘンデルのソプラノ・パート(特に英語作品)を歌うのに最適なキャラクターである。我が国では、この種の名歌手を得ることは難しく、彼女はその意味で稀少な逸材と言えよう。

日本では未だヴェールに隠された部分の多い大作曲家の魅力と偉大さを啓蒙するべく、弛みない活動を展開中の当団体。このディスクが、その貴重なドキュメントとして、また日本人によるヘンデル演奏の輝かしい一コマとして永く聴き継がれることを願ってやまない。

\*付記 次回のHFJ公演は来年の1月9日、ヘンデルのオラトリオ中でも最大規模を誇る力作「サムソン」(初演版 1743年)の全曲演奏という、壮大なプロジェクトである。